

## アンドルー・ラミー

- 1 「ファイヴィの門には花が咲いている  
たくさん綺麗に咲いている  
その真ん中にヒナギクがありました  
アンドルー・ラミーと名づけられて
- 2 「ああ あの人の想いの代わりに  
あの花を胸に抱ければ  
その花びらに口づけをして 愛撫して  
アンドルー・ラミーの代わりに抱きたい
- 3 「初めて私が愛する人と出会ったのは  
ファイヴィの森の中でした  
彼は私の唇に何千回も口づけをして  
いつでも私をかわいいと言ってくれました  
その時の私の返事はいつも  
私の麗<sup>うるわ</sup>しのアンドルー・ラミー」
- 4 「愛する人 私はエディンバラに行かねばならぬ  
あなたのもとを去らねばならぬ」  
「本当につらくて言葉がでない  
ああ あなたと一緒にいたらいいのに」
- 5 「ですが 私のことを信じてください  
君のアンドルー・ラミーなのだから  
あなたのもとに戻ってくるまで  
決してほかの女に口づけはいたしません」
- 6 「私のことを信じてください  
あなたの子フティのアニーなのですから  
あなた様に戻ってくるまで  
決してほかの殿方と口づけはいたしません」
- 7 しばらくして 彼はエディンバラから  
麗<sup>うるわ</sup>しのファイヴィの丘へ戻ってきた  
北東へと顔をむけ  
ティフティのアニーを探しました
- 8 「エディンバラでも恋人が  
リースでも恋人が  
モントローズでも恋人が  
ダルキースでも恋人がいつも側にいたのです

9

「東も西もどこにいても  
愛する恋人は私の胸に  
東や西に行こうとも  
愛する恋人はファイヴィに

10

「愛する人はいつも私の胸の中  
どんなペンでも彼女のことは綴れない  
彼女はいつでも品に満ち満ちて  
彼女のような人はついぞ見たことがない

11

「でも 彼女の父親ティフティは  
私との結婚を許さないのです  
だって彼女は財産もちで  
片や 私は文無しだ

12

「愛がこの体をやつれ衰えさせ  
ああ 愛がこの体を滅ぼしてしまう  
あなたへの愛ゆえに死なねばならぬ  
さようなら かわいいアニー」

13

母親はベッドから起き上がり  
侍女たちを呼びました  
「お前を苦しめてるのは何なの アニー  
ああアニー お前は夢を見てるのか

14

「どんな悲しい事がお前の眠りを邪魔してるのか  
言っておくれよ アニーよ」  
アニーは悲しそうに溜息をつき  
ただ口にするのはアンドルー・ラミーの名

15

父親は娘をひどく叩きました  
母親も同じように叩きました  
姉妹はひどく嘲あざわらりました  
一番ひどかったのは兄

16

兄は妹をひどく叩きました  
何度も何度も叩きました  
兄は妹を倒して わき腹を叩きました  
アンドルー・ラミーとの恋ゆえに

17

「まあ やめてお兄様

紳士方に軽蔑されますわ  
ファイヴィの地主様がいらつしやるの  
私に会いに来られるの

18 「ファイヴィ様は私にキスをして抱きしめて  
私を苦しめてるものが何か問われるでしょう  
そうしたら私は答えましょう  
それはアンドルー・ラミーを想つてと」

19 姉妹たちは扉の前に立ちふさがりました

「ああ お姉さま ほら  
嘲りの言葉で姉を深く悲しませました  
牛もお姉さまのことでモーモー鳴いてるわ」

20 「まあやめて 妹よ

そんな事を言つて私を悲しませないで  
ファイヴィの牛の鳴き声よりも  
トランペットの音色を聴きたい

21 「愛がこの体をやつれ衰えさせ

ああ 愛がこの体を滅ぼしてしまう  
あなたへの愛ゆえに死なねばならぬ  
さようなら アンドルー・ラミー」

22 彼女の父親は長い咎めの手紙を

ファイヴィ様に送りつけました  
自分の娘がファイヴィ様の家来  
アンドルー・ラミーに魔術をかけられたと

23 「ティフティよ お前は同意して

若者を結婚させてやらねばならぬ」  
「とんでもない 私は許しませんぞ  
トランペット吹きとの結婚なんぞ」

24 ファイヴィ様は二度目の手紙を見て

とても悲しい気持ちでいっぱい  
「この土地一番のかわいい娘が  
アンドルー・ラミーがため死んでしまった」

25 ああ アンドルー・ラミーは

麗しのファイヴィ家の屋根に登り

大きく高い音でトランペットを吹きました  
音はファイヴィ様の土地一帯に広がりました

26

「今まで幾度も夜道を歩いたが  
疲れることは決してなかった  
でも今では 悲しみを連れて歩いている  
決して愛するあの人には会えないのだ

27

「愛がこの体をやつれ衰えさせ  
ああ 愛がこの体を滅ぼしてしまう  
あなたへの愛ゆえに死なねばならぬ  
私も参る かわいいアニーよ」

(伊藤真紀訳)